

# 西欧知識人と20世紀の共産主義

—ユートピアと誤解—

Les intellectuels occidentaux et le communisme au XX<sup>e</sup> siècle:  
utopies et malentendus

ソフィー・クーレ

剣 持 久 木 訳

Sophie COEURÉ

traduit par Hisaki KENMOCHI

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）

第11巻第2号(2013年3月)抜刷

*Journal of International Relations and Comparative Culture*

Vol. 11, No. 2 (March 2013)

【翻 訳】

## 西欧知識人と20世紀の共産主義

—ユートピアと誤解—

ソフィー・クーレ

剣 持 久 木 訳

静岡県立大学の教員のみなさん、学生の皆さん。本日は、このような機会にお招き頂きありがとうございます。本日は、皆様のまえて、西欧知識人と共産主義についてのお話をさせて頂くのを大変光栄に存じます。このテーマは、長年、うかつに手を出せない、感情的な論争を巻き起こしてしまう、冷静な歴史研究ができないテーマでありました。

まず最初に、私が、モスクワやパリの公文書館でこの研究を始めた頃のことからお話しさせていただきます。それはイギリスの歴史家、エリック・ホブズボームの表現に従えば、「短い20世紀<sup>1</sup>」が終わったとき、つまりソ連が崩壊した、1990年代初めのことでした。数ヶ月のうちに、すべての共産主義国がヨーロッパから消え、50年にわたって東西2つのブロックに単純に分けられていた地図が複雑なものになりました。もちろん、共産主義は世界中に依然存在していますし、アジアやラテンアメリカなどで状況は複雑です。しかし、本日は、私をもっとも良く知っている文化エリアであります、フランスとヨーロッパの1920年代から1970年代にかけてのお話しをさせていただきます。

今日、すでに20年以上が経過して、共産主義をめぐる政治的状況、知的な状況そして研究状況は、他のいかなる研究対象がこれまで経験したことがないような、著しいそして急激な変化を遂げています。おそらく他のどの研究対象にくらべても、共産主義の歴史やソ連と他の世界の関係の歴史は、「すべての歴史は現代史である<sup>2</sup>」という、イタリアの歴史家、ベネデット・クローチェの考察にあてはまります。そこで私は、これからまず最初に、歴史研究と史料についてお話しします。その次に、モスクワが、ブルジョワ的西欧の知識人に向けて作り上げた、影響力行使と宣伝のための組織とその政治的原理について分析します。最後に、この宣伝の効果について考えます。肯定的なものにせよ、否定的なものにせよ、ソ連のイメージと、知識人へのその伝搬ある

1 Eric Hobsbawm, *The Age of Extremes. The Short Twentieth Century, 1914-1991*, London -New York, 1994, 河合秀和訳『20世紀の歴史——極端な時代（上・下）』（三省堂, 1996年）

2 Benedetto Croce, *Teoria e storia della storiografia*, 1915, 羽仁五郎訳『歴史の理論と歴史』岩波文庫、1952年

いはその拒否との関係は、どのようなものだったのでしょうか。それは、盲目、無邪気さ、臆面のなさ、あるいはユートピアなどという言葉で表現できるのでしょうか。

## 歴史研究と史料

60年以上の間、ソ連や共産主義についての歴史叙述は、信用できないもの、という烙印が捺されて来ました。これには主に2つの理由があります。一つは、学者のものであれ、あらゆる発言は、必然的に政治的な色合いをともなっているという考えがありました。もう一つは、広く共有されたものですが、この歴史叙述のためには、信頼できる史料が欠けているというものでした。このような状況の下では、研究状況に特有の問題が生じることとなります。フランスは、ソ連研究への政治的影響がもっとも遅く生じています。アメリカに比べますと30年遅れて、1970年代になってようやく、大学レベルでの研究が、全体主義の概念をめぐる政治的な色合いを持つようになりました。それから、西欧におけるソ連の影響力や宣伝の歴史は、激しい論争のテーマになりました。一方で、共産党系の知識人がそれを否定し、他方でソ連に敵対的な人たちが、ソ連の秘密機関やKGBに由来する工作として告発する、といった具合でした。政治的にレッテルを貼られるということをおそれ、そしてまた、入手可能な史料への不信、たとえばソ連に敵対的な亡命者の証言などへの不信から、フランスの歴史研究者たちは、このテーマを避けていました。アメリカの場合は状況が違っていました。1960年代からすでに、ソ連への知識人の旅行についての研究がなされ、ヨーロッパにおけるマルクス主義の影響についての議論がなされてきました。そして1990年代になると、ソフトパワー<sup>3</sup>の概念、つまり軍事力や経済力ではない、文化や世論を通じて行使される柔らかい力の概念が幅を利かせるようになってきました。

フランスにおいては、1990年代に出版された書物についての議論も依然、非常に政治的な生々しさを帯びていました。フランソワ・フェレの『幻想の過去<sup>4</sup>』やステファヌ・クートワが編集した『共産主義黒書<sup>5</sup>』はいずれも共産主義の犯罪と嘘を告発しています。これらの本をめぐる騒ぎは、政治的論争の最後の花火でした。というのも、それは、共産主義諸国の消滅と、ヨーロッパ各国の共産党のほとんどすべてが消滅するという事態によって急速に収まっていくからです。

3 Cf. Joseph Nye, *Soft Power: The Means to Success in World Politics*, New York, Public Affairs, 2004. 山岡洋一訳『ソフト・パワー——21世紀国際政治を制する見えざる力』(日本経済新聞社, 2004年)

4 François Furet, *Le passé d'une illusion. Essai sur l'idée communiste au XXe siècle*, Paris, Robert Laffont, 1995. 楠瀬正浩訳『幻想の過去—20世紀の全体主義』(バジリコ, 2007年)

5 Stéphane Courtois (dir.), *Le livre noir du communiste. Crimes, terreur, répression*, Paris, Robert Laffont, 1997. 外川継男訳『共産主義黒書(ソ連篇)』(恵雅堂出版, 2001年)

こうして、この頃から、道徳的な糾弾や政治的工作と言うレッテル貼りを避けることが可能になり、知識人と共産主義やソ連との関係について、より冷静に研究することができるようになりました。しかし、このことが可能になったのは、なによりもまず、同じ時期に、モスクワやかつての東欧社会主義諸国の公文書、さらには徐々にではありますが、西欧諸国の共産党の文書が公開されるようになったからです。と申しますのも、それまでは、議論が政治的であったということに加えて、史料が閲覧できない、廃棄されてしまった、あるいは信用できない、とくにソ連が提供した統計データがそうですが、このような状況が重く存在していたからです。このことは例えば、1950年代初めに出版された、ハンナ・アーレントの『全体主義の起源<sup>6</sup>』の中で主張されています。したがって当時は、具体的事実ではなく、思想についての研究で満足するしかありませんでした。フランソワ・フュレはまさにこうした状況で、「10月革命の世界的魅力」の謎や西欧における共産主義の誘惑を説明しました。当時は、共産主義とソ連の関係について研究するために入手可能な史料は、ソ連旅行者の経験談と鉄のカーテンの向こう側から届いた証言だけでした。それが、この20年来、文字通りの史料の山（大陸）が、発見され、歴史家は探検家の役割を果たすようになったのです<sup>7</sup>。たしかに外務省文書のように、依然アクセスが困難な史料はありますが、今や、論争的な歴史の専制を恐れることなく歴史研究をすることが可能になり、共産主義者の政治参加やソ連の影響力についての、具体的で、史料に基づく歴史研究をすることが可能になったのです。

## 独創的で強力な影響力行使システム

近年公文書館で私がとりくんできた研究の主要な成果は、ソ連の独創的で強力な影響力行使システムがいかに構築されて来たかということを示したことでした。このシステムは部分的にしか目に見えず、秘密のものでしたが、西欧の知識人たちと共産主義の関係の枠組みを構成していました。このような企てがどうして誕生したのかを理解するには、1917-18年の状況を考える必要があります。モスクワで権力の座に着いたボルシェビキの指導者たちが新しいタイプの国家を作り、それはマルクスレーニン流の共産主義が世界の未来であるという、歴史解釈によって支えられていました。そこから、ソ連の体制がモデルであり、このモデルの肯定的なイメージを流布すること

6 Hannah Arendt, *The origins of totalitarianism*, New York, 1951, 大島通義・大島かおり・大久保和郎訳『全体主義の起原 (1・2・3)』(みすず書房、1972-74年、新装版1981年)

7 とりわけ以下を参照されたい。*Cahiers du monde russe*, dossier « Archives et nouvelles sources de l'histoire soviétique, une réévaluation », 40 / 1-2, janvier-juin 1999, Éditions de l'EHESS. Comma, dossier "Archives and Archival Issues of Russia", 3-4, 2002. *Communisme*, dossier « Nouvelles archives soviétiques et renouveau historiographique », 70/71, 2002.

が重要になります。つまり同時に2つのことを目指すことです。革命を輸出するということと、レーニンが1918年に「万里の長城」と名付けた敵に対してこの生まれたばかりの国家を守るということです。敵というのは、1920年代には「イギリス、フランスの帝国主義」、1930年代後半からはファシズムの脅威、そして1947年からは「アメリカ帝国主義」を指しています<sup>8</sup>。

これと同時にモスクワは、帝国権力の中心となると共に、1919年にコミンテルンによって組織された、世界中の革命政党のネットワークの中枢になります<sup>9</sup>。ただ、1921-22年には、ソ連はヨーロッパでの革命の失敗をさとり、レーニンは、社会体制の異なる国家との「英和共存」という考えを生み出しました。そこからソ連における国家と党の対外政策のダブルスタンダードが長期にわたって存在することになります。一方で共産主義イデオロギー、他方でロシア帝国から受け継いだ遺産の防衛と国益の追求ということなのです。

知識人、ロシア語の表現にしたがえばインテリゲンチアは、ソ連の宣伝においては、もっとも優先されていたわけではありませんでした。ソ連では、労働者プロレタリアや農民が勝利の原動力とみなされていました。インテリゲンチアは社会主義国家では、その地位、学歴、職業で定義される、作家、芸術家、建築家、映画監督、ジャーナリストたちでしたが、それはまた社会的機能も担わされていました<sup>10</sup>。1917年以前からすでにレーニンは、文化の位置、とくに文学の果たすべき役割、党に奉仕すべき役割を理論化していました。1923年にはトロツキーが『文学と芸術』の中で、「同伴者」という概念を提唱しています。これは、プロレタリア革命の理想をまだ完全には理解していない、躊躇している作家たちを指します。ソ連の外で、ブルジョワ知識人たちがソ連への好意的イメージを構築したり、場合によってはソ連の文化モデルを自分たちの国に取り入れることに重要な役割を演じることができるとのことです<sup>11</sup>。しかし、これは必ずしも知識人たちが共産党に入党すべきということではありません。むしろモスクワは、党の規律に従わない作家たちとの関係にしばしば悩まされていま

8 Cf. Edward H. Carr, *The bolshevik revolution*, London, 1950-1953, 原田三郎・宇高基輔訳『ボリシェヴィキ革命——ソヴェト・ロシア史 1917-1923』(全3巻:みすず書房, 1967年) George F. Kennan, *Russia and the West under Lenin and Stalin*, London, Hutchinson, 1961. 川端末人・尾上正男・武内辰治訳『レーニン・スターリンと西方世界——現代国際政治の史的分析』(未來社, 1970年) John L. Gaddis, *We know now. Rethinking Cold War History*, Oxford University Press, 1997. 赤木完爾・斉藤祐介訳『歴史としての冷戦——力と平和の追求』(慶應義塾大学出版会, 2004年)

9 Cf. Kevin McDermott, Jeremy Agnew, *The Comintern. A history of international communism from Lenin to Stalin*, Basingstoke, Macmillan, 1996. 萩原直訳『コミンテルン史—レーニンからスターリンへ』(大月書店、1998年) Pierre Broué, Pierre, *Histoire de l'Internationale communiste*, Paris, Fayard, 1997.

10 Cf. E. Etkind, G. Nivat, I. Serman, V. Strada (dir.), *Histoire de la littérature russe*, Paris, Fayard, 1988-1992. Stuart Finkel, *On the Ideological Front: The Russian Intelligentsia and the Making of the Soviet Public Sphere*, Yale University Press, 2007. Cécile Vaissé, *Les ingénieurs des âmes en chef. Littérature et politique en URSS (1944-1986)*, Paris, Belin, 2008.

11 Cf. David Caute, *The Fellow-Travelers: A Postscript to the Enlightenment*, London, 1973.

す。アンリ・バルビュス<sup>12</sup>やルイ・アラゴン<sup>13</sup>のように党に従うものでしたが、1939年の独ソ不可侵条約に際してのポール・ニザン<sup>14</sup>のように危機の時に党を出る者もいました。

ロシア革命の最初の時期から、外務人民委員とコミンテルンは、ソ連とブルジョワ国家を隔てる「防疫線」<sup>「コルドンサニタール」</sup>を崩そうと努めて来ました。戦争が終わるか終らないうちに、ヨーロッパを横断して辿り着いた数人の旅行者たちが迎えられています。革命家や、フランス人ジャーナリストのアルベール・ロンドル。彼はソ連についての最初のルポルタージュを送っています。これはまた、西欧諸国のできてまもない共産党に資金や情報を秘かに送るということでもありました。このようにして彼らは、ボルシェヴィズムを恐怖と無秩序の体制であると描いた亡命ロシア人たちの出版物に対抗して、好意的な証言を出版することができました。

1920年代中頃にソ連が国家として安定するようになると、文化宣伝のための最初の固有の組織が登場します<sup>15</sup>。西欧ブルジョア諸国がソ連を公式に承認し、ソ連の文化政策は、大使館や領事館などの外交ネットワークをよりどころにすることができるようになります。フランスの場合は、1924年に大使館が開設されました。1925年には対外文化関係協会、VOKSが創設され、トロツキーの妹であり、当時、共産党の主要な指導者の一人であったレフ・カマーネフの妻、オルガ・カマーネヴァがそのトップにつきます<sup>16</sup>。この組織VOKSの役割は、ブルジョワ諸国からの旅行者の受け入れ、雑誌の出版、西欧にむけての雑誌、写真、展示会の輸出などです。そしてVOKSは、コミンテルンに属していた革命作家国際同盟、ついで作家同盟のような、プロレタリアを専門に対象とした文化の輸出を担当していた機関とも並行して、活動していました。「防疫線」の向こう側では、この活動は独自のネットワーク、世界中に作られた「ソ連友の会」によって中継されていました。モスクワ文書は、きわめて具体的、正確に、有益に使えると思われた知識人たちがどのようにコンタクトを受けていたかを教えて

12 Cf. Jean Relinger, *Henri Barbusse écrivain combattant*, Presses universitaires de France, 1994.

13 Cf. Pierre Daix, *Aragon*, Paris, Tallandier, 2005.

14 Cf. Pascal Ory, *Paul Nizan : destin d'un révolté*, Complexe, Bruxelles, 2005.

15 Cf. Frederick C. Barghoorn, *The Soviet Cultural Offensive. The role of Cultural Diplomacy in Soviet Foreign Policy*, Princeton University Press, 1960. Sylvia Margulies, Sylvia R., *The pilgrimage to Russia. The Soviet Union and the treatment of foreigners (1924-1937)*, The University of Wisconsin Press, 1968. Paul Hollander, *Political Pilgrims. Travels of Western Intellectuals to the Soviet Union, China and Cuba (1928-1978)*, New York -Oxford, Oxford University Press, 1981. Nigel Gould-Davis, "The Logic of Soviet Cultural Diplomacy", *Diplomatic History* 27 (2), 2003, p. 193-214. Michael David-Fox, *Showcasing the Great Experiment. Cultural Diplomacy and Western Visitors to the Soviet Union, 1921-1941*, Oxford University Press, 2011.

16 Cf. Jean-François Fayet, «La VOKS : la société pour les échanges culturels entre l'URSS et l'étranger», *Relations internationales*, n° 114/115, Paris, 2003, pp. 411-423 et "VOKS : The Third Dimension of the Soviet Foreign Policy", in Jessica C. E. Gienow-Hecht, Mark C. Donfried (dir.), *Searching for a Cultural Diplomacy*, Oxford - New York, Berghahn Books, 2010, p. 33-49.

くれます。フランスでは、ロマン・ロラン、アンドレ・ジッド、イギリスではウェッジ夫妻。どのように彼らに対して、ロシア語翻訳が提案され、全額ソ連持ちで招待されたのか、これらの旅行がどれほど念入りに準備されたのか、そして帰国してからは、どのように、書物や講演会の形で証言をすることが求められたのか、ということまでわかります<sup>17</sup>。モスクワ文書から明らかになったのは、モスクワの指導者たちが100パーセント関与したこれらの活動では、文字通り「浸透工作noyautage」が威力を発揮したということです。それは、共産主義とソ連の影響力行使に共通の政治空間を創り出すということであり、自発性と自律性の外観を維持する関係に気を配り、資金を出し、そして宣伝と影響力行使を不可分に一体化させるということでした。

このような文化的影響力行使政策は1930年代に最初の頂点を迎えます。ファシズムやナチズムの脅威がソ連の指導者たちに西欧民主主義国との同盟を促し、人民戦線での共産党と他の非共産党左翼との同盟に好意的状況をつくりだし、中間層、とくに知識人たちの支持を求めるようになったのです。作家、芸術家だけでなく、学校教員、大学教授、建築家、学者たちが大挙してソ連を訪問しています。モスクワが資金援助する出版活動も頻繁に行われています。1937年にはパリで開催された万国博覧会では、ドイツ館に対峙して立てられたソ連館が、共産主義の威信と力を象徴していました。文化、演劇、映画はフランス人民戦線の中核的な存在でした<sup>18</sup>。それが、スターリン体制の強化によって、大粛清が、とりわけ文化宣伝の責任者たちを襲ってしまいます。オルガ・カメーネヴァや彼女の後継者、アレクサンドル・アロシエフは銃殺されてしまいます。さらには、第二次世界大戦によって、文化交流はほぼ完全に断絶してしまいます。

文化交流が以前とおなじような構造で再開されるのは、1956年の非スターリン化からです。モスクワには中央の機関が、西欧には「ソ連友の会」のネットワーク、出版物、旅行の招待そしてソ連の実績についての証言のセット、などが復活します。ソ連の地政学的な矛先はこの頃には、世界全体に向けられ、影響力行使の優先順位は、アジアやアフリカの脱植民地諸国に向けられています<sup>19</sup>。しかしながら、ヨーロッパにおいては相変わらず、革命の実現や共産党の政権獲得が現実生を失ったとはいえ、ソ連を防衛すること、各国共産党の活動を可能な限り強化することが目指されていました。

このような活動を支えていたのは、ヒトラーに対するソ連の勝利と言うはかり知れ

17 Cf. Sophie Coeuré, Rachel Mazuy (dir.), *Cousu de fil rouge. Voyages des intellectuels français en Union soviétique - 150 documents inédits des Archives russes*, Paris, CNRS Editions, 2012.

18 Cf. Pascal Ory, *La Belle illusion. culture et politique sous le signe du Front populaire 1935-1938*, Paris, Plon, 1994.

19 Cf. Odd Arne Westad, *The Global Cold War: Third World Interventions and the Making of Our Times*, Cambridge University Press, 2006, 佐々木雄太監訳『グローバル冷戦史——第三世界への介入と現代世界の形成』（名古屋大学出版会, 2010年）

ない威信、戦争によって荒廃した世界におけるマルクス主義の魅力や革命の展望でした。多くの知識人や芸術家たちが西欧の共産党に入党しました<sup>20</sup>。それが冷戦の開始でじきに状況が一変し、各国の共産党は警戒され孤立し、西独のように一時期、禁止されるに至ります。後から振り返ってみれば、西欧の指導者たち、とくにアメリカ人は、ソ連の文化的影響力行使システムの有効性を理解していたということになります。彼らは、例えば、文化自由会議のような、国際的な反共産主義システムをつくっています<sup>21</sup>。しかしフランスにおいては、「同伴者」たちが相変わらず、共産党の行事やソ連大使館の行事に通っていました。たとえば、共産党員だったピカソ、あるいは入党はしなかったものの、「反共主義は犬である<sup>22</sup>」と声高にのべていたジャン＝ポール・サルトルなどです。

### 共産主義の誘惑の分析：ユートピアと誤解

モスクワから西欧インテリに向けられたこれらの活動を分析するということは、西欧各国の歴史という枠組みのなかで、一つの国際システムとその受容がどのような位置をしめたかということを考えることです。しばしば莫大な量が投入されたこれらの手段は効果的だったのでしょうか。この質問への答えは、間違いなくイエスといえるでしょう。共産主義の魅力と、ソ連の実績の好イメージというソ連の威信は一体となっていました<sup>23</sup>。このような宣伝を組織することで、ソ連は、長期間にわたって大規模に、批判的な情報を食い止めることに成功していました。1933年のウクライナやコーカサスをおそった大飢饉も、数百万のソ連市民を苦しめた強制労働や強制収容所<sup>24</sup>送りも、1960年代の経済的失敗も、民主政治の欠如も、さらにキリスト教会への迫害などに対する批判的な情報を。逆にいえば、知識人たちの好意的証言、とりわけ目撃者としてもたらされる旅行者たちの証言は、ソ連の体制についての肯定的なイメージを

20 Cf. Jeannine Verdès-Leroux, *Au service du Parti. Le Parti communiste, les intellectuels et la culture (1944-1956)*, Paris, Fayard - Minuit, 1983 et *Le Réveil des somnambules. Le parti communiste, les intellectuels et la culture (1956-1985)*, Paris, Fayard, 1986. Ludmila Stern, *Western Intellectuals and the Soviet Union, 1920-40. From Red Square to the Left Bank*, London & New York, Routledge, 2007

21 Cf. Pierre Grémion, *Intelligence de l'anticommunisme. Le congrès pour la liberté de la culture à Paris (1950-1975)*, Paris, Fayard, 1995. David Caute, *The Dancer defects. The Struggle for Cultural Supremacy during the Cold War*, Oxford University Press, 2003.

22 Jean-Paul Sartre, *Situations*, tome IV, Paris, Gallimard, 1964. 『サルトル全集』第30巻（人文書院、1982年）

23 Cf. Marcello Flores, *L'Imagine dell'URSS. L'Occidente et la Russia di Stalin. 1927-1934*, Milan, Il Saggiatore, 1989. Sophie Coeuré, *La grande leueur à l'Est. Les Français et l'Union soviétique (1917 - 1939)*, Paris, Le Seuil, 1999

24 Cf. Pierre Rigoulot, *Les paupières lourdes. Les Français face au goulag : aveuglements et indignations*, Paris, Éd. Universitaires, 1991.



流布する上で重要な役割を果たしていました。「ホスピタリティーのテクニック」はいかなくその効果を発揮しています。文字通りのソ連神話が広められ、意図的に眨められたブルジョワ世界に対応して、一つ一つの話が語られ、すべての問題は、ツァーリズム時代の遺産やソ連内外の体制の敵のサボタージュのせいにして説明されています。

西欧の人々、とくにフランス人が、ソ連や共産党を支持していたことを、「知らなかったから」と自分たちのナイーブさを根拠に言い訳することがありますが、これは部分的にしか通用しません。というのも「反革命」亡命者たちや、スターリン時代の背教者たちや、強制収容所の脱走者、さらには国内反体制派たちの否定的な証言は、アレクサンドル・ソルジェニツィンを筆頭に、1920年代から1970年代まで、後を絶たなかったからです。情報統制も決して完璧ではありませんでした。ソ連国内においても、文書館史料によれば、旅行者受け入れシステムがうまく機能しなかった例もありました。ガイドや通訳たちは、旅行の印象が悪かったことを語っていますし、あるフランス人の団体は、強制労働に向けて移送中の一行と、誤ってすれ違うということがありました。

それでは、西欧知識人たちへの共産主義の、そしてより広い意味での進歩主義の影響力の強さはどう説明したらよいのでしょうか。私の考えでは、四つの要素が、この文化的影響力の効果に加わったのだと思います。一つ目は、フランス大革命で生まれた平等主義的ユートピアの遺産で、これについてはフランソワ・フュレが見事に分析しています。単純化されたマルクスレーニン主義に従って必然的に社会主義に到達するはずの世界の未来のためのモデルであることを自ら主張したソ連は、知識人たちが歴史の動きに参加し、人民に近づくことを可能にした<sup>25</sup>、というわけです。二番目の要素は、国際関係の歴史が、ソ連が長期にわたって反ファシズム、ついでアメリカに対抗する進歩と平和の勢力であると規定することを首尾よく説明しているということがあります。第三に、モスクワは、1930年代以来、ソ連の防衛を個々の国の利益と結びつけ、一定の制限の下に、各国の共産主義が、国内政治の期待に応じて愛国的スローガンを掲げることを認めたということがあります。これには各国共産党が過度に自立性をもとめてしまうというリスクは伴っていました<sup>26</sup>。最後に、より長期的にみるならば、西欧の知識人たち、とりわけフランス人は、モスクワ型の共産主義の欠陥を、ツァーリズムの遺産やロシアの国民性によって長年説明して来たということがあります。ロシアの国民性とは、専制政治や集団生活に従うという性質です<sup>27</sup>。

25 Cf. Tony Judt, *Past Imperfect: French Intellectuals, 1944-1956*, University of California Press, 1992, Sunil Khilnani, *Arguing Revolution. The Intellectual Left in Postwar France*, Yale University Press, New Heaven and London, 1993.

26 フランスについては、cf. Marc Lazar, *Marc, Le Communisme, une passion française*, Paris, Perrin, 2002.

このようにして、知識人における共産主義の影響力の低下がゆっくりとしたものだったことがよく理解できます。中国やキューバのようなソ連に代わるモデルが登場したこと<sup>28</sup>、西欧社会の中での労働者や農民の構成割合が低下したこと、反ファシズム文化や核戦争の脅威が消滅したこと、東側諸国の共産主義に対する抵抗運動の登場、1956年のハンガリー、1968年のチェコスロバキア、1980年代のポーランドやアフガニスタン、そしてソ連国内の反体制派など<sup>29</sup>。ソ連国内の問題については、おそらくそれが、より長期的な政治的想像界の一部であるということが、今日でも、プーチン大統領の体制を正当化するために「ロシアの魂」が引き合いに出される様を目にする際に感じられます。

最後に、共産主義への政治参加のもっとも謎めいた部分を考えてみたいと思います。これは信じること、忠誠をつくすこと、そして決別することについてです。1920年代初めには革命的暴力を嫌っていたロマン・ロランでしたが、彼は1930年代には、はっきりと、「ヨーロッパの反動」に奉仕しないためにもロシア革命を批判しない必要性ということを説明していました。彼は、1935年のソ連旅行の際には、ソ連の宣伝に大々的に利用されることを受け入れました<sup>30</sup>が、独ソ不可侵条約の時に決別しています。ロシア文学を愛して、ファシズムに対して激しく敵対したアンドレ・ジッドは共産主義の計画を擁護し、1936年にはVOKSの招待を受け入れます。彼の有名な『ソビエト紀行<sup>31</sup>』の中で、ジッドは1936年に、極めて圧迫された統制に対するいら立ちを表明し、帰国後はソ連経験のあるフランス人たちからも取材しましたが、彼のソ連批判を、彼自身が経験して深く傷ついた同性愛の抑圧と結びつけることは決してしませんでした。共産主義と決別するというのは、裏切り者として名指しされ（ポール・ニザンの場合がそうでしたが）、周囲との人間関係から排除され、しばしば著者としての快適な権利を奪われる危険を冒すことでもありました。かくして多くの知識人の間には自己検閲の現象が広がっています。裏返せば、共産党に入るということは、政治的、思想的な規律が求められ、多くの知識人は最後にはそれを拒否して、マルクス主義のより自由な解釈に向かうこととなります。

27 Cf. Martin Malia, *Russia under Western Eyes. From the Bronze Horseman to the Lenin Mausoleum*, Harvard University Press, 1999, traduction française, *L'occident et l'énigme russe. Du cavalier de bronze au mausolée de Lénine*, Paris, Le Seuil, 2002.

28 François Hourmant, *Au pays de l'avenir radieux, voyages des intellectuels français en URSS, à Cuba et en Chine populaire*, Aubier, 2000.

29 Cf. Cécile Vaissié, *Pour votre liberté et pour la nôtre. Le combat des dissidents de Russie*, Paris, Robert Laffont, Paris, 1999.

30 Romain Rolland, *Voyage à Moscou (juin-juillet 1935)*, éd. par Bernard Duchatelet, Paris, Albin Michel, 1992. 宮本正清他訳『ロマン・ロラン全集』第19巻（みすず書房、1983年）所収

31 André Gide, *Retour de l'URSS*, Paris, Gallimard, 1936 ; *Retouches à mon retour de l'URSS*, Paris, Gallimard, 1937, éd. critique par Martine Sagaert, Paris, Gallimard, Bibliothèque de La Pléiade, 2001. 小松清訳『ソヴェト旅行記』岩波文庫、1992年、小松清訳『ソヴェト旅行記修正』新潮文庫、1952年

ジャン＝ポール・サルトル<sup>32</sup>は、コルホーズの視察等に招かれたモスクワから帰った際に、『リベラシオン』紙に1954年に次のように書いたとき、かれは自分の言葉を本当に信じていたのでしょうか。「ソ連において批判の自由は完全に保証されている。ソビエト市民は、絶えず進歩していく社会の中であって、日々生活を向上させている。」現在はフランス国立図書館で非公開とされている、サルトルと彼の通訳で愛人であったレナ・ゾニナの間の手紙の閲覧ができれば、おそらく、この疑問に答えられるでしょう。1970年代末になってようやくサルトルは、1974年に刊行されていたソルジェニツィンの『収容所群島』を、「重要証言」と認めています。「私は嘘をついていた」と彼は1975年に『ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール』誌のインタビューで認めています。しかし彼はつけ加えています。「私は収容所がスターリンの死後も存在したことを知らなかったし、とりわけゲーラグ（強制収容所）が何であったのかなどは知らなかった。」さらに彼は言います。「私は罪悪感を感じていないし、私に罪はない。」ルイ・アラゴンの場合、彼の共産主義への忠誠は1931年から1982年の死まで続きますが、彼の場合はロシア出身のパートナー、エルザ・トリオレとの関係抜きには説明できませんし、かれはソ連に30回以上行って、常に、虚構と現実の間で、巧みに「虚実取り混ぜる」術を持っていました。

以上申しあげましたように、新たな史料の公開によって明らかになったのは、ソ連の情報を浸透させ、1970年代までソ連が革命と社会主義ユートピアを体現しているという思想を押し付けることに成功して来た、影響力行使システムがいかにか有効であったのか、ということです。さらに共産党の外や周辺での「同伴者」たちの曖昧な役割についても、より理解できるようになりました。とはいえ、個々の西欧知識人とソ連や共産主義との関係は、彼ら一人一人に固有の政治的、知的軌跡の中でしか、本当の意味では理解できないということも、最後に申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。

## 訳者あとがき

ソフィー・クーレ氏は、パリ第7大学（通称パリ・ディドロ大学）の教授であり、社会科学高等研究院（EHESS）のロシア、コーカサス、中欧世界研究所研究員もつとめている。今回の来日は、訳者が研究代表者をつとめている科学研究費（研究課題：歴史認識の越境化とヨーロッパ公共圏の形成）による招請で実現した。本稿は、2012年10月29日に静岡県立大学で国際関係学部特別講義として実施された講演の原稿にクーレ氏が後日、注記を加筆したものである。今回の来日中には、静岡の他、京都（龍谷

32 Cf. Jean-François Sirinelli, *Sartre et Aron. Deux intellectuels dans le siècle*, Paris, Fayard, , 1995 . Bernard-Henri Levy, *Le Siècle de Sartre*, Paris, Grasset, 2000. 石崎晴巳、三宅京子、沢田直、黒川学訳『サルトルの世紀』（藤原書店、2005年）

大学、10月27日)、東京(日仏会館、10月31日)でそれぞれ「ソ連の文化外交と資本主義諸国：1920年代から1980年代まで」、「記憶の略奪－第二次大戦期にナチスの戦利品をへてソ連に押収されたフランス公文書－\*」と題する講演を行っている。

訳者が最初にクーレ氏と最初に知り合ったのは、1988年に遡る。当時パリ第10大学のDEA課程(博士課程の1年目の課程)に籍を置いていた訳者であるが、たまたま高等師範学校Ecole Normale Supérieureの寮生という資格も得ていた関係で、高等師範学校生として同じパリ第10大学のDEA課程に籍を置いていたクーレ氏と親しく話す機会があったのである。高等師範学校、理工科学学校、国立行政学院に代表されるいわゆるグランゼコールがフランス特有のエリートの養成機関であることはよく知られているが、なかでも高等師範学校は、サルトルやフーコーのようなフランスを代表する知識人の母校としてあまりにも有名である。高等師範学校の直接的な目的はアグレガシオンと呼ばれる高等教授資格試験に合格することであるが、クーレ氏は訳者と机を並べていた頃がまさにアグレガシオンの受験準備のまっただなかであった。アグレガシオンは、合格するだけでも将来の高等教育機関でのポストが事実上約束される資格であるが、その中でも、彼女は1989年度の試験に歴史部門合格者130人中3番で合格している\*\*。このように、当初から研究者としてのエリートコースを歩み始めたクーレ氏の処女作は、博士論文をもとに、フランス知識人へのソ連の影響力行使の実態を明らかにした『東方の曙光\*\*\*』であるが、本講演の冒頭でも述べられている通り、ソ連邦の崩壊による文書館事情の劇的な好転を背景に、一躍フランスのソ連研究の第一線に躍り出ている。第二次大戦期にフランスからナチスドイツに持ち去られ、ベルリン陥落後には、さらにソ連軍に押収されていた大量の公文書が、モスクワに保管されていたことが明らかになったが、それがフランスに返還されることになった際、専門家としての調査を依頼されたのがクーレ氏であった。クーレ氏は、この返還された押収文書を存分に活用して、本講演でもその一端を披瀝したように、西欧の知識人がいかにソ連の文化政策に取り込まれていったかを明らかにして行った。講演の中でクーレ氏が述べていたように、この研究テーマは、20年前であれば、きわめて政治的な色眼鏡で見られがちな対象であった。ソ連において政治的反对者が強制収容所に入れられているということは広く知られるようになってからでも、共産主義体制そのものを批判することは、反共、反動というレッテルが貼られることを覚悟しなければならなかった。それが冷戦の終結で大きく情勢が変わる訳だが、冷静な研究が可能になった背景は、イデオロギー対立の終焉だけでなく、資料状況の好転があったということ

\* 日仏会館での講演については、『日仏歴史学会会報』28号(2013年6月刊行予定)掲載の記録を参照されたい。

\*\* «Agregations : Histoire, par ordre alphabétique», *Le Monde*, le 4 août 1989.

\*\*\* Sophie Coeure, *La grande lueur à l'Est. Les Français et l'Union soviétique (1917-1939)*, Paris, Seuil, 1999.

が、今回のクーレ氏の講演が明らかにしてくれたことである。つまり冷戦時代であれば、ソ連側の「工作」を指摘することは、ともすればためにする陰謀説の類いととられる可能性が大きかったという状況が一変したということである。クーレ氏の手法は、一切のセンセーショナリズムを排した地道な実証主義であり、学界への貢献は、研究内容もさることながら、その研究スタイルにあると言っても過言ではない。実際、モスクワ返還文書に取り組む過程で、この文書の数奇な運命を辿った著書\*\*\*\*は高く評価され、パリ大学区長賞Prix Henri-Herzを受賞している。ちなみにクーレ氏は現在、ソ連に影響を受けたフランス知識人の中でも、ピエール・パスカルという、敬虔なカトリックという異色な存在であった人物の伝記を準備中ということである。

実は、訳者は留学時代から10数年、クーレ氏とは音信が途絶えていたのであるが、たまたま数年前に、パリの国立公文書館で史料調査をしていた際に偶然再会し、以来様々な形で研究協力をさせて頂いている。今回の静岡県立大学での講演会開催にあたっては、広域ヨーロッパ研究センターの協力も仰いでいる。今後は、クーレ氏との研究協力関係が、訳者一人だけではなく、静岡県立大学における研究、教育の発展にも寄与できることを期待している。



クーレ教授（左から2番目、久能山東照宮にて）

\*\*\*\* Sophie Coeuré, *La mémoire spoliée. Les archives des Français, butin de guerre nazi puis soviétique (de 1940 à nos jours)*, Paris, Payot, 2007.